



古高取の窯—内ヶ磯窯跡—

Kyushu Historical Museum Exhibition guide

1 お国焼とは？

お国焼くにやきとは、日本の各地域で独自に発達した焼き物のことを言いますが、その始まりは、安土・桃山時代のことです。特に、各地に広がる契機となったのが、文禄・慶長の役と呼ばれる豊臣秀吉の朝鮮出兵でした。この戦いで各大名は、多くの文人、土工、石工、陶工、金工、木工、瓦工、紙工などの職人を日本の自分の領地へ送りました。

特に九州の諸大名は、陶工を優遇し、陶土とうどや釉薬ゆうやくなども持ち帰り、自領での陶器生産に力を入れていくようになります。例えば、薩摩さつまの島津義弘が連れ帰った朝鮮人陶工たちによって発展した薩摩焼などが有名です。

2 内ヶ磯窯の開窯

朝鮮出兵に従軍した大名の一人、黒田長政は、慶長5年（1600）の関ヶ原の合戦の功績により、筑前52万石を拝領します。長政は慶長12年に、朝鮮か

ら連れ帰ってきていた高取八山たかとりはちざんに、筑前直方えいまんに永満寺じたくま宅間窯を開かせます。これが、筑前黒田藩御用窯による陶器製造のはじまり、すなわち「高取焼」のはじまりです。

永満寺宅間窯の開窯から程ない慶長19年（1614）に、同じ直方うちがその内ヶ磯に窯が移され、大々的に陶器が生産されていくようになります。

内ヶ磯窯は、発掘調査により、14の焼成室たきぐちと焚口1室の併せて15室からなる連房式登窯れんぼうしきのぼりがまで、長さ約40m、比高差約15mもの長大な窯1基により操業されていたことが判明しています。

八山は、寛永元年（1624）に、朝鮮への帰国を願い出たことによって、二代藩主忠之の怒りに触れて浪人となったため、内ヶ磯窯も終煙を迎えたと言われています。その後、八山は同じ筑前の嘉麻郡上山田唐人谷で山田窯を開くことになりますが、永満寺宅間窯、内ヶ磯窯、山田窯で焼かれた高取焼は、特に「古高取」と呼ばれ、江戸時代、茶人を始めとす



内ヶ磯窯跡全景

多くの人々に愛されました。素朴な茶器・雑器類が多く、作風としては古田織部の影響を強く受けていると言われていいます。内ヶ磯窯跡の発掘調査では、椀・水指・瓶などの茶道具の他、トチンやハマのような窯道具も出土しています。

3 高取焼の広がり

二代藩主忠之は小堀遠州との交流を深め、いわゆる「遠州好み」と呼ばれる茶器が多く焼かれ、遠州七窯の一つにあげられたこともあって、高取焼は「遠州高取」とも呼ばれ、茶陶生産地として全国的に広く知られるようになっていきました。

一時は追放された八山でしたが、寛永7年(1630)に許されて、穂波郡中村(現在の飯塚市幸袋)の白旗山窯に開窯します。そして寛文5年(1665)には、八山の子・八蔵は、白旗山から小石原(上座郡・現在の朝倉郡東峰村)(小石原高取)、元禄年中に大飽谷(早良郡・現在の福岡市早良区田島)に移転し(御庭高取)、18世紀には、「東皿山」と「西皿山」に分かれていきました。さらには、小石原からは藩領を越え、豊後日田領の小鹿田焼の開窯にも影響を与えました。



福岡県内近世窯跡分布図

- あがの系統
- 高取系統
- ▲ その他の系統

4 今に生きる高取焼

現在に残る高取焼と言ってもすぐに思い浮かぶのは、小石原焼でしょう。明治維新の廃藩置県により、御用窯が廃窯となっていく中で、高取焼の操業は下火となっていきました。

そのような状況の中、無名の陶工達が作り上げ



高取焼出土状況(内ヶ磯窯跡)

る「民陶の美」に光を当てたのが、20世紀前半の柳宗悦やバーナードリーチなどの民芸運動を推進する人々でした。彼らの献身的な運動の結果、小石原焼のような「民陶」の価値が見直されて世間の注目を集め、復興を成し遂げていったのです。そして小石原焼は、昭和33年にはブリュッセル世界工芸展でグランプリを受賞するという快挙も成し遂げました。今でも、5月のゴールデンウィークに行われる「窯開き」では、いつもは人影も少ない山村にも多くの人が訪れ、焼き物を買って求めていきます。高取焼の伝統を引く小石原に一度足を運んでみてはいかがでしょうか。

(学芸調査室 岡寺 良)



内ヶ磯窯跡出土鉄絵陶器



内ヶ磯窯跡出土陶磁器



編集 発行:平成23年2月1日

九州歴史資料館
KYUSHU HISTORICAL MUSEUM

〒838-0106 福岡県小郡市三沢 5208-3
TEL 0942-75-9575 FAX 0942-75-7834
URL <http://www.fsg.pref.fukuoka.jp/kyureki/>